

江戸名所圖會 十九

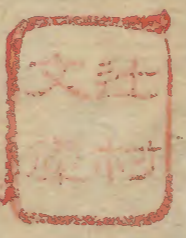
和書門			
八	六	三	
一	六	三	
二	一	〇	
冊	架	函	號

内閣文庫			
和	八	七	〇
書	二	〇	
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 8870
冊數	20 (19)
函號	174 36



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



三國權行社

小梅村田の中あり

別當ハ天台宗延命寺と

号之神像ハ弘法大師の作なり同大師の勸請ありとあり文和

年間三井寺の源慶僧都再興と慶長の頃迄ハ今の地より南の方

あり以後此地より移せり當社の内陣ハ英一蝶の畫あり牛若丸と

辨慶の羊身の圖を掲げたり

牛嶋とありの神前より西を

立や畑をとりめりその神

あつ日雨あり

社傳云元禄六年の夏大雨旱魃とあり六月の廿八日村民ありて神前より雨の

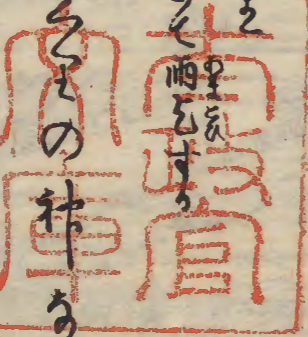
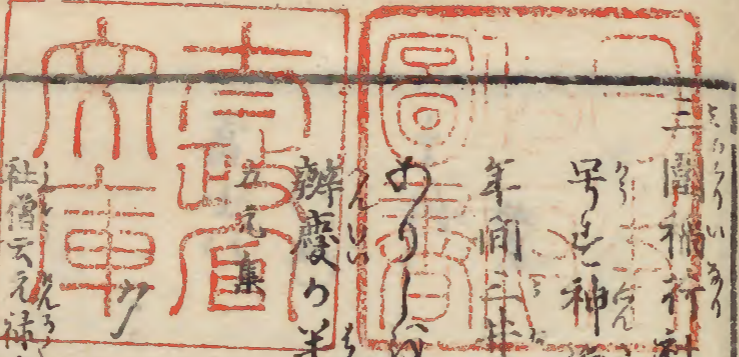
祈りて其日其前も當社より祈りては一人の中に雨とあり其前より雨の

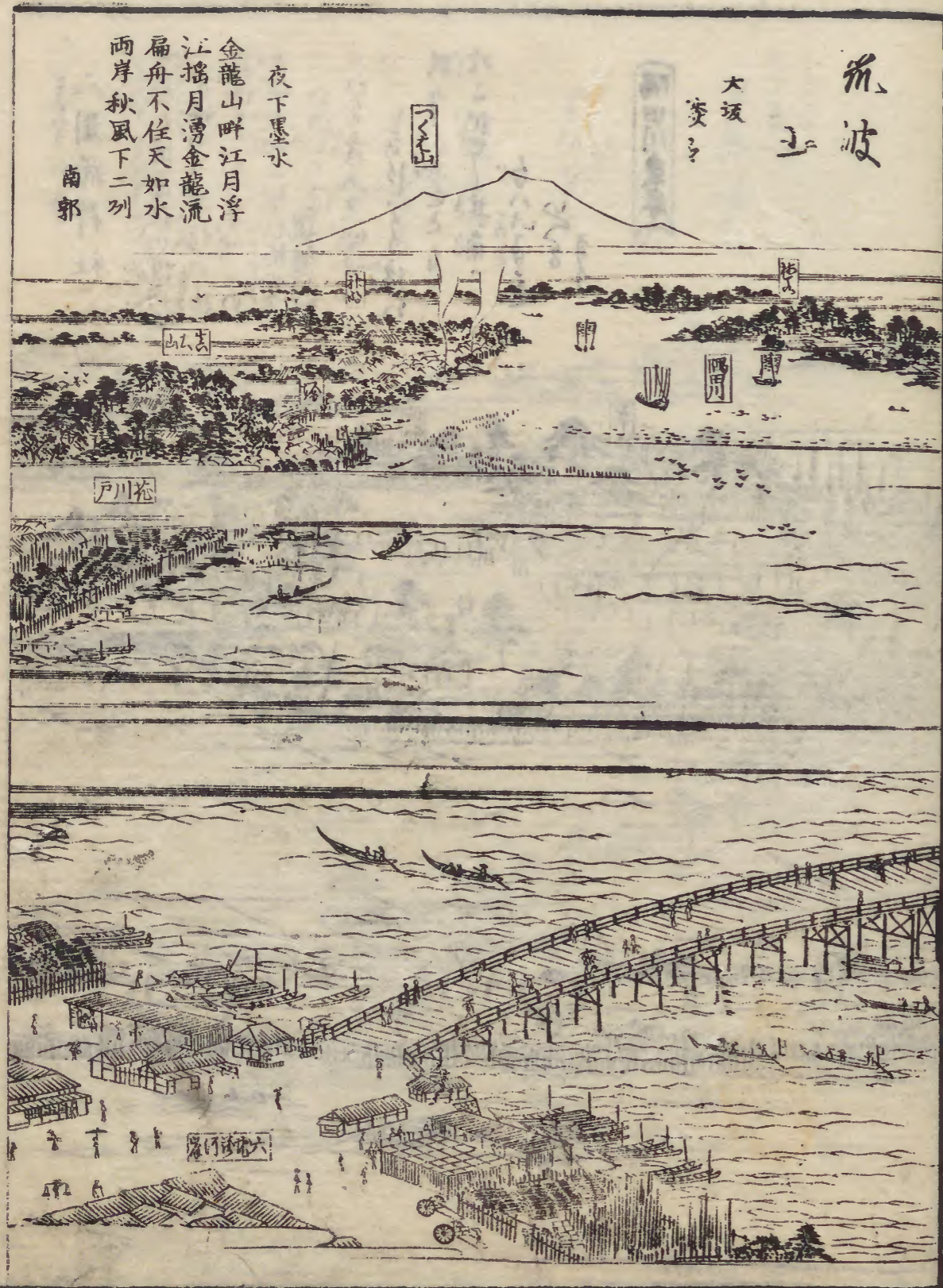
今も尚神に侍りあり

御前王子権現社 同所北の方あり別當ハ最勝寺と号し牛嶋の

總鎮守なり祭禮ハ隔年九月十二日北本所石原新町の旅所一神

幸ありて同十五日小歸輿と祭神素盞鳥尊と牛嶋前清和天皇第七





夜下墨水
 金龍山畔江月浮
 江搖月湧金龍流
 扁舟不住天如水
 兩岸秋風下二列

南郭

大坂
 波
 山



大川橋
 吾妻橋も
 名?

隅田川兩岸

富士八

紫
 川
 子

中

川

二圃稲荷社

一老嫗あり稲荷の徒
非供をさぐる剛の
老嫗田面よりひ拍堂ハ
一つの物つくともありあり
これを食ふ老嫗世よ
わらむるじより後の
瓶もよとせとるり
吟記せし其前ハ
白ひるを
り

隅田川東岸



五元集

早稲酒中

き川松

い物

焼

ま

其角





能勢竹水園の
向の長命寺の
境内竹藪の中
の今其の
墓所の句碑を
建たり

隅田川東岸



雪見
不
ま
ま
ま
ま

皇子王孫權 其二坐あり相傳清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋

九月慈覺大師東園弘法の頃素盞鳥尊位冠の老翁と化現此

比跡を垂永く國家を守護んと告め仍大師一社ヲ奉

上足尚社の本比佛大日如來の良本阿闍梨を留て是歿守らむ又五十七代

陽成院の御宇清和帝第七の皇子當國遷されをたすひ天慶

元年丁酉九月十五日此地よ於て薨あ依用山良本阿闍梨ら小

暮ヲ奉り牛御前の相殿よ合祭る奉るといふ

其後靈告あり云く

素盞鳥尊第七の御子

按又其列輪田御崎前撞御崎其餘相列の二大江河の月岬等を経て海に臨める此あり
今尚社の辺を須勢社と名はるもむら海辺の例みく其頃ハ文孝の御時ニ作りたりしと
ありしゆく推あり著海に慣し中半を歴て陸地となり此の次の新島蓮寺の条や
はまのひらりり其餘やをのりせり半の御時とする義も遠あるに似たりあつる所は陸の
徳家の美を清く一時の文孝を前し書ゆらうる再ハサキの訓を帝と稱せむと云ふは
これと神号と傳前と稱するの又人のうらも用ひたりしむ往々其例ありと云ふは
ゆらと故よこれを異と

當寺昔のいさとの庵室より寛永年間 大樹御遊獵の初少く御不豫

小あらせられし此寺内より休せたまひ庭前の井の水をりて御薬を服

ぬひし須臾中へ常小あらせぬひし此井より長命水の号を賜り

寺の号をも改むれば肯 台弁あり亦長命寺と稱す 昔の常泉寺

殊更當より雪の名所なりて前より隅田川の流をりて風をたらせしとほ

牛頭山弘福禪寺 牛御前宮の東より隣る此辺を須崎といふ 黄檗山

の禪室より洛陽萬福寺を模して本尊の唐佛の釋迦如來左右に迦葉

可難より牛山鐵牛和尚延寶紀元癸丑創造す毎歳七月十五日大施餓鬼修行有

佛殿 大威徳 寛天日月久晦祖燈雲霞 卑地雷音雷林木冬華葉

見相傾身敢保未忘法 揮毫布比自法海界黄金

大治練宋未塔入選 唐室粉碎方許を場

木犀の佛殿 剎竿旗 座禪堂 佛殿 浴場 大治練宋未塔入選

龍右の分 剎竿旗 座禪堂 佛殿 浴場 大治練宋未塔入選

牌堂 剎竿旗 座禪堂 佛殿 浴場 大治練宋未塔入選

慈願堂 剎竿旗 座禪堂 佛殿 浴場 大治練宋未塔入選

法積山堆摩詰家風真廣大 浴室 天王殿 佛殿 浴室

日未月法衲侶法衣永殷亮 浴室 天王殿 佛殿 浴室

道泰玉麟現瑞 浴室 天王殿 佛殿 浴室

林東墨園夏儀 浴室 天王殿 佛殿 浴室

大坐前并佛殿云須言身 浴室 天王殿 佛殿 浴室

高懸寶淨如法終身 浴室 天王殿 佛殿 浴室

鎮守宮 天柱石 鐘樓 天王殿 佛殿 浴室

鹽竈明神等の諸神を崇む 天柱石 鐘樓 天王殿 佛殿 浴室

弘福禪寺



元禄二年仲秋
初之隅田川
記行

牛改山ままのり
松ありまのり
斎堂ままのり
りれん机の籠
船魚をいし
眼赤ののり

斎堂了

あさくは
ゆい
あられ
くれ
秋風



遊牛頭寺 南郭
門外長堤墨水流
江東實樹倚牛頭
金龍閣誰家宴
玉女陵波何處遊
藏輕舟搖湖岸繫
忘撥鳥下晚洲浮
到來心地應空澗
那更風烟起客愁

庵 倚
 俗間請地
 秋葉権現の
 辺を去る
 留人まじり
 定みり



須崎の
 清比秋葉の
 辺にまじり
 酒肉店多く
 各節をうま
 鯉魚を煮
 酒客あわ
 らに宴飲を
 中も葛西
 左衛門とい
 葛西二市
 清重の意商
 あつと云付
 ともし非を
 ひさやとい
 昔まじり
 計と云ら
 麦斗と唱
 今いひや
 して麦斗
 みる人
 りぬ



牛頭山弘福寺大鐘銘並序
 瑞聖牛和尚住弘福之明年修葺寺宇將大完井
 伊氏伯耆守直武公與玉心院太夫人壽林元榮大
 師發心施金為造巨鐘以幽顯寓書徵余銘為之
 銘曰阜兮有大法將整飭淋宮兮曷殊天匠幸值
 牛首之毋子全心乃百鬼氏兮乃簡赤金範斯巨器
 賢守兮禪林曉昏考擊兮萬歲以空為口兮密婁為毫
 兮永鎮祈慶兮主孫振振以千春億兆樂業兮四海
 宣淺鮮斯行莫殫一七徐林鐘上澣穀且
 歸仁益勤兮莫殫一七徐林鐘上澣穀且
 疑書厥勤兮莫殫一七徐林鐘上澣穀且
 貞亨五羊歲在著雍執徐世高泉漱敬撰
 支那國傳臨濟正宗世四世

漢門總門をいふ
鐵牛の筆あり

山法牛

聯右

福地弘安法象集
 玄門高僧聖法

秋葉大権現社 同所三下のちり東の方請比村あり
 遠別秋葉権現を勧請し編祈の相殿とと
 あるへり云云應年間の勧請なりとも別尚ハ三寶も末もあて

千葉山満願寺と号し神泉の松と稱する社前ありて松の控より

清泉涌出するをり諸の病み験ありといふ
祭礼は毎年十一月廿八日小祓あり

境内林泉幽邃うて四時遊觀の地あり門前酒肆食店多く名

主所を構へて鯉魚を蓄ふ

清瀧山蓮華寺 寺鳴村小あり
寺記云く昔此山に海原あり後世清瀧と改む

本尊阿弥陀如来の像ハ惠心僧都の作といふ
醍醐の三寶院小属也

方子堂 奉堂の右あり奉尊聖徳太子の像ハ十六歳の真影はて

太子自彫造あり一と云北条經時の念持佛より往古ハ相及鎌倉依て

日今ハゆりしを弘安二年の秋北条頼助寺院よりひよ奉尊共あり

此山引橋一同年八月二日入佛供養を營一故今に至る迄此日を

以て縁日とて又是より元寛元二年の夏國中大よ疫疾流行

人民死する者少かりて経時頼小是を歎け奉尊よ告て諸人の病



諸比
秋葉権現宮
子代世綿奇社
社
丹楓
晚秋の
比
柳
奇
景



若し消除せんとして懇々祈願と成夜奉る経時よ靈示ありて秘蔵
 と揚人即此秘蔵小よりて其頃病を退る命を全入する者とて
 ありととあり 今に至るまで

相傳の寛元四年丙午二月下旬北條經時疾に臨む其時舎才時頼
 を側へ招たれし云く我疾難治あり死後よ至らば一宇の梵刹を創
 建し年頃念る處の聖徳太子の像を安置すべしといひ終つ同四月

朔日享年二十八歳小して逝去あり 東鑑云寛元四年丙午四月一日今日入道に位下
 行武藏守平朝臣經時卒と法名を樂年二十三

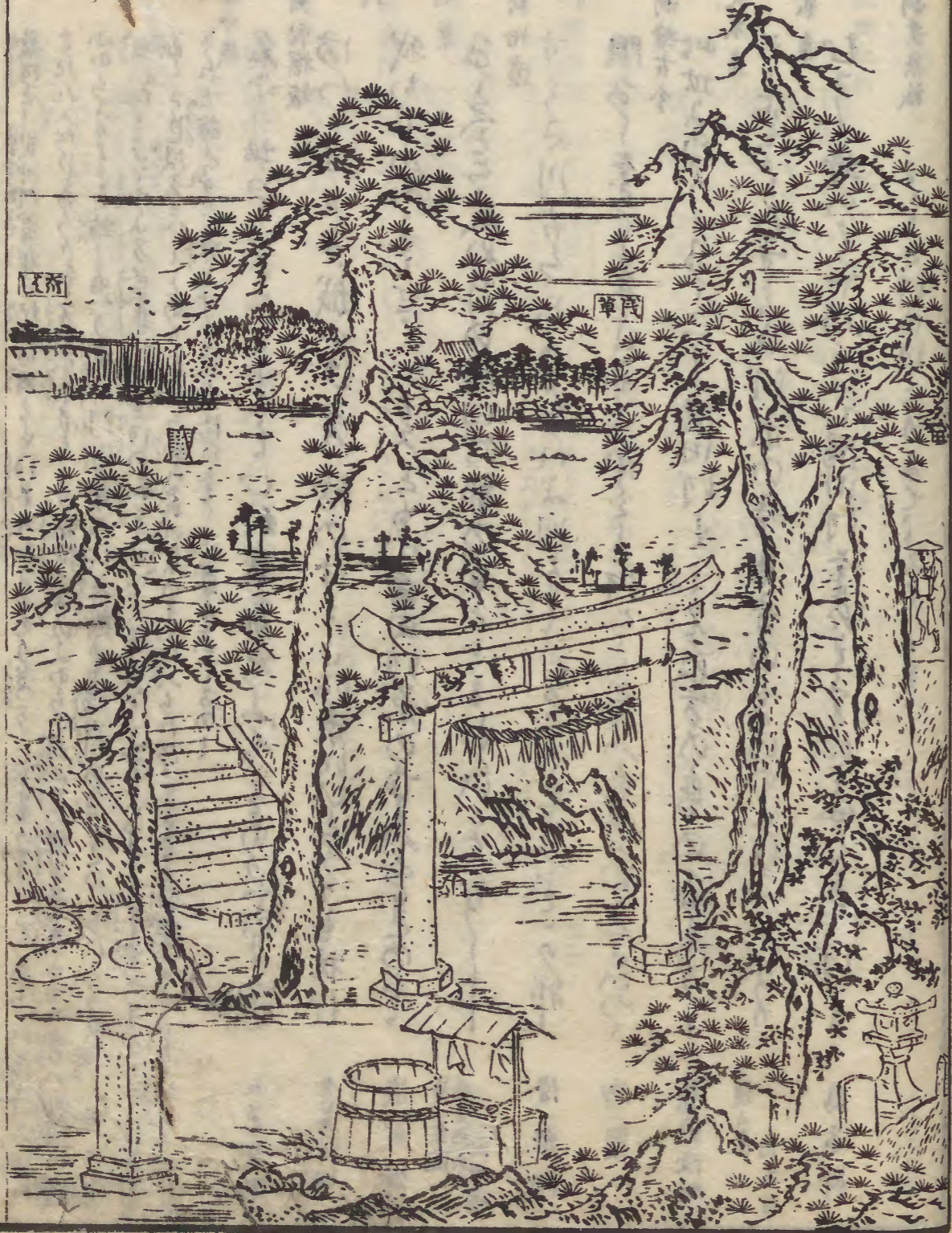
とあり證 依時頼遺命を奉りて鎌倉依妙谷一宇を闢き蓮華寺
 と号く 經時之法号を蓮華寺殿前
 武列安樂大禪定門と号す 即辦法印審範を以て住山とて 寺記云審範
 深井法眼範智り保ありと云されと鎌倉
 大日記云良忠とありと云ん於法よ詳し

之難の志頻りて忽小刺髪し弘安二年の秋鎌倉の蓮華寺に
 寺鳴身移し自居山たり 依目大僧正頼助と号せり抄云先審範を住山とすとあり
 鎌倉ありとのをのりあるへ此寺傳く至りて頼助は

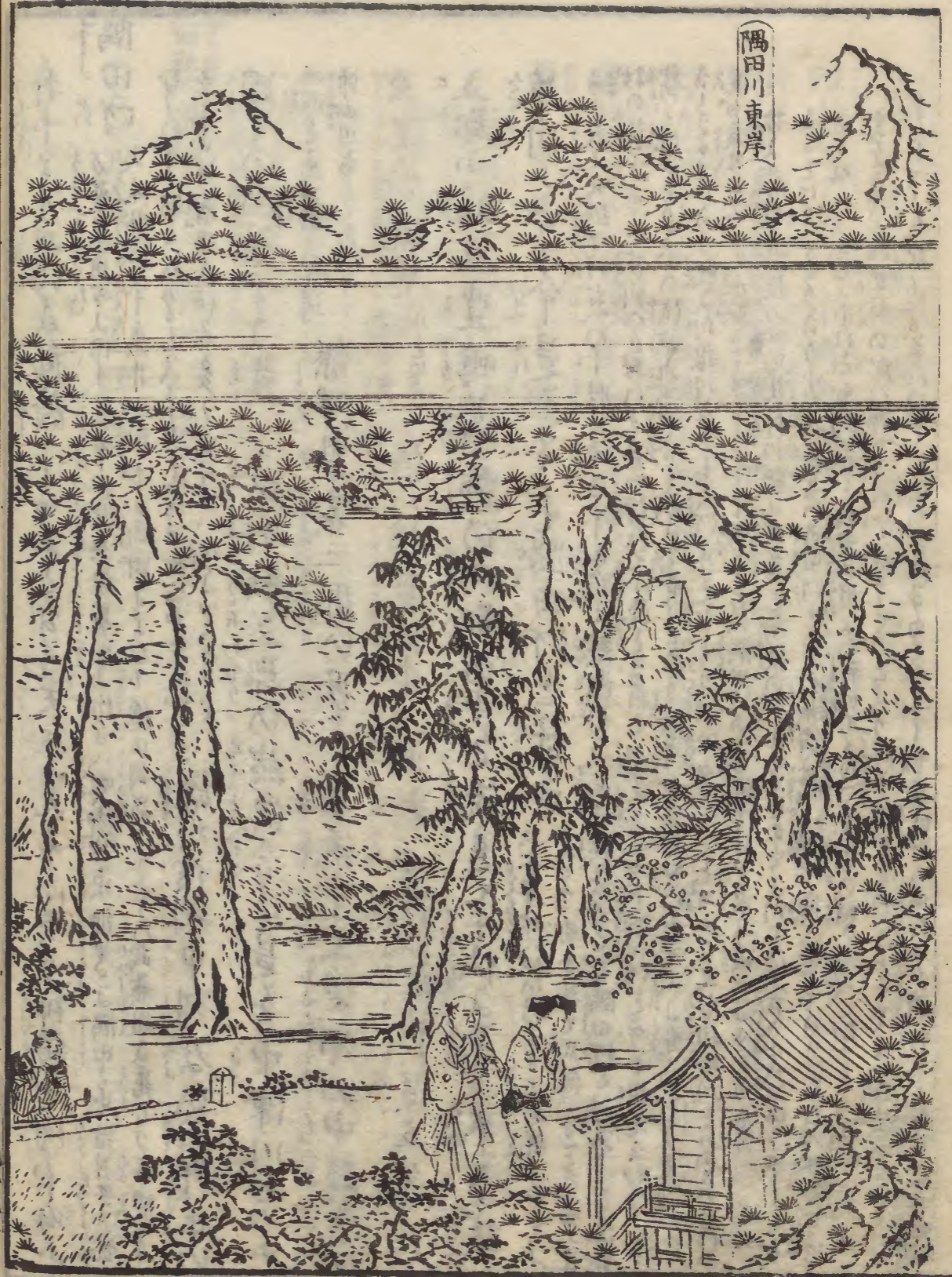
寺島
 太子堂
 蓮花寺



白岩明神社



隅田川東岸



梅花無盡藏 江上春望 註曰道灌靜勝公拓福鹿

一兩山諸尊宿 豈小年浮舩 數艘於隅田河詩歌 鼓吹

十時之壯觀也 春遊不覺在天涯 霞

隅田鴨亦應都鳥 故吹晚來聲入霞 小塚有柳道

注曰隅田在武藏下總之千葉構長橋三條云云

偶田川即事 曼珠院二品良尚法親王

夏天波靜角田川 棹子蕩榮泛蓋舩

當時業平遺愛地 風流千歲至今傳

我由... 筆のす... 河をめぐ... 名や流すへき

都鳥... 舟路... 近衛 信尹卿

都鳥... 舟路... 近衛 信尹卿

都鳥... 舟路... 近衛 信尹卿

都鳥... 舟路... 近衛 信尹卿

隅田河... 都鳥... 冷泉 久久卿

初花... 舟路... 冷泉 久久卿

初花... 舟路... 冷泉 久久卿

初花... 舟路... 冷泉 久久卿

初花... 舟路... 冷泉 久久卿

初花... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

隅田河... 舟路... 冷泉 久久卿

追討の大勢とく丸瀨門佐平直方右兵衛佐中原成道等朝探し
 應一ニ萬二千余騎と發向と忠常其身ハ千葉の城ハ楯籠舎
 陸奥権女忠頼を大勢と其勢二萬余騎を率一とす
 南陣を取同十五日官軍成道の舎才伊勢成俊直方の子
 息阿多見四郎聖範共と勢を合せ先登一と戦ふ故先陣の
 大頼致走とこれと忠常と殘兵一萬五千余騎と駈互られ官軍の
 後陣ありあり直方も本道の勢の落着と推互らと心あらと
 返一放軍の兵卒を集んと隅田河原に陣を取と云

東鑑曰 治養四年庚子十月二日辛巳武衛相乘
 于常胤廣常等之舟楫濟太井隅田河精兵及三
 萬餘騎赴武藏國豊嶋権守清光葛西三郎清重等
 最前泰上又足立右馬允速元兼日依受命爲御迎
 泰向云云

北條九代記小文治五年七月十九日頼朝と奥別義衛追討の首途
 ありと云条下千葉成常胤八田右衛門尉知家ハ東海道の大河と

一と常陸中總兩國の勢を率一と宇方行方を往て岩崎隅田

川の溪と渡り遠下界

須田河原 隅田河原みせれ

夫木集 一とすこの河原を躬行の如くありと云渡りあるらん

隅田河堤 深堀橋より一浦り然谷に至る行程凡拾六里是と然谷堤と

云天正二年小田系北条氏これを筑末たりと云 御當家よしの

官府の命ありと三圍編芥の辺より本母寺の隙近堤の左右ハ桃橋柵の

三樹を殖させられ二月の末より孫生の末と紅紫翠白枝を

交一これあり錦鏑を晒さる如く幽艶賞するに堪たをすハ菫菜碎

米菜盛りの頃ハ比上ハ花禮を敷り如く一時の壯觀たる

隅田宿 竹れの池をりあり今あるハからと往古の奥別街道の釋舎

ありハ東鑑ハ治養四年庚子十月二日頼朝を右井隅田の河を渡り

るとのみ条下に今日武衛の御乳母故八田武者宗綱り息女

改定毒

隅田川堤
春景



隅田川の堤をめぐりて
 青柳の枝髪も緑の眉
 うわいさううたこれ
 花のふとろひそめ
 春のひはくらあんと
 ままうまいたるえいと
 えひのりうたを
 ひこころのたす挿頭よや
 も折らんとさうかしの
 とまる木の幸
 ありやう

東嶽山小属と本尊ハ五智如來あり中よの阿弥陀如來の像ハ聖徳

太子の作るりと云侍ハ貞元年間忠圓阿闍梨當寺を草創して天正十八年

合命あり依り梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

關より梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

むつれハ梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

本母寺と畫され一真蹟今梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

寺料若干を附せられ朱章を賜ふ又寛文の始

御遊獵の初當寺を御建立ありて新殿ありと造りし梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

按ハ本母梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

止賀と訓ハ西條詩話ハ幸得梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

一又梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

梅の梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

増續梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

北朝山濤字致遠赴召宋神宗問曰卿自山路來自

驛路來濤曰自山路來上曰木公木母如何濤曰木

公方傲歲木母正會春

注曰木公松也木母梅也稱旨除中書云

本母寺縁起の跋ハ湖海新聞を引く梅を本母とするを奉り湖海新聞ハ上の吏堅

志の意ハ月一又青木氏ハ著る草廬雜考ハ此の載りたる今集の跋ハ

雪みれハ本毎に花を咲よりりしを梅と云てあらま

春の物ハ吹ちハ風のうりり香ハ本毎ハ梅とありひありりれ

年の内の香を本毎の起とて春を返とまねくふ學

梅若丸塚 本母寺の境内よのを塚上よ小祠あり梅若丸の壘を初

山王権現とて梅若丸の山王後ハ柳を植て是を印の柳と号く昔

例年二月十五日忌日たる故ハ大志仏興行あり此日都々の

貴賤羣衆と来せり

田圃雜記 ありてすしハの辺よりりて梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

古塚のゆけゆくありのすしハの辺よりりて梅若寺と呼りしを慶長十二年近衛関白信尹武系

中頃一衆冥白康道を園東下向のころ此地ハ

本母寺
梅若塚
水神宮
若宮八幡

隅田川東岸

本母寺

会

月の

其角



田園雜記

つうへの塚の
すゝめりた
今のこゝりに
おるえて

古塚の

くけ行の

すゝめり

すゝめり

ねん

袖

道真准后



隅田川東岸

東の

隅田川

西

北

東

隅田川

西

近衛 孫承信尹公



東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

東の隅田川西の北東隅田川西

康道公

近衛 信尹公

良尚親王

同縁起は惟房の
副をたを憂一日

五歳中て又其後

縁起云梅若丸は洛陽北白川吉田少将惟房卿の子なり

吉田の御神は新成のり後諸られし一児ありて其初め梅若丸なり

七歳の年比叡の月林寺に入て習学せり又其頃東門院といふ小も

松若丸といふ児ありて日頃才の程を挑と争ひければ梅若丸より

をうとせざるを彼坊の法師原に惜れりよありひそに闘争の

事出まよけれ梅若丸は潜小舟を造して北白川の舟に帰らんと

一吟みて大津の浦小至る頃二月廿日ある夜の夜なる然し陸奥の

信夫孫をとり人商人小舟のひ孫をとりおと欺きて遠く東の方小

梅若丸七郎のこゝろ
比叡の月林寺を
のりかて花洛北
白川のあたりに
とてみても大はの
浦のありはるる
奥陸の信夫のあた
とてみるべしとの
なりはるるわさむ
りてはるるとの
隅田川はあはる
とてみるべしとの
詳あり

因よ三人買集む
陸奥南の産
ありとて今も
の人の其怨
あつとてあはる
よとてあはる
彩田の産
人となりて
活るるわさむ





夫木杖
庵傍の
さき
河原
目くらね
実松の
里
光俊

二其



牛田
薬師堂
関屋里
隅田川上流

二其

子世

関屋
天満宮

三其



鐘の潭

同所隅田河荒川綾瀬川の二俣の石をこして名は

由業殿とある石領の中より立三俣と

沈没せりとも又橋場長昌寺の鐘ありともいひ今西寺に存する石の

新鑄の鐘の深きも此の石を載たし何れ是なりん

牛田薬師堂 本母寺より二四丁北の方牛田村のありま真言宗ありて子葉

山西光院と号く徳治二年丁未當國の領主子葉氏の草創開山を

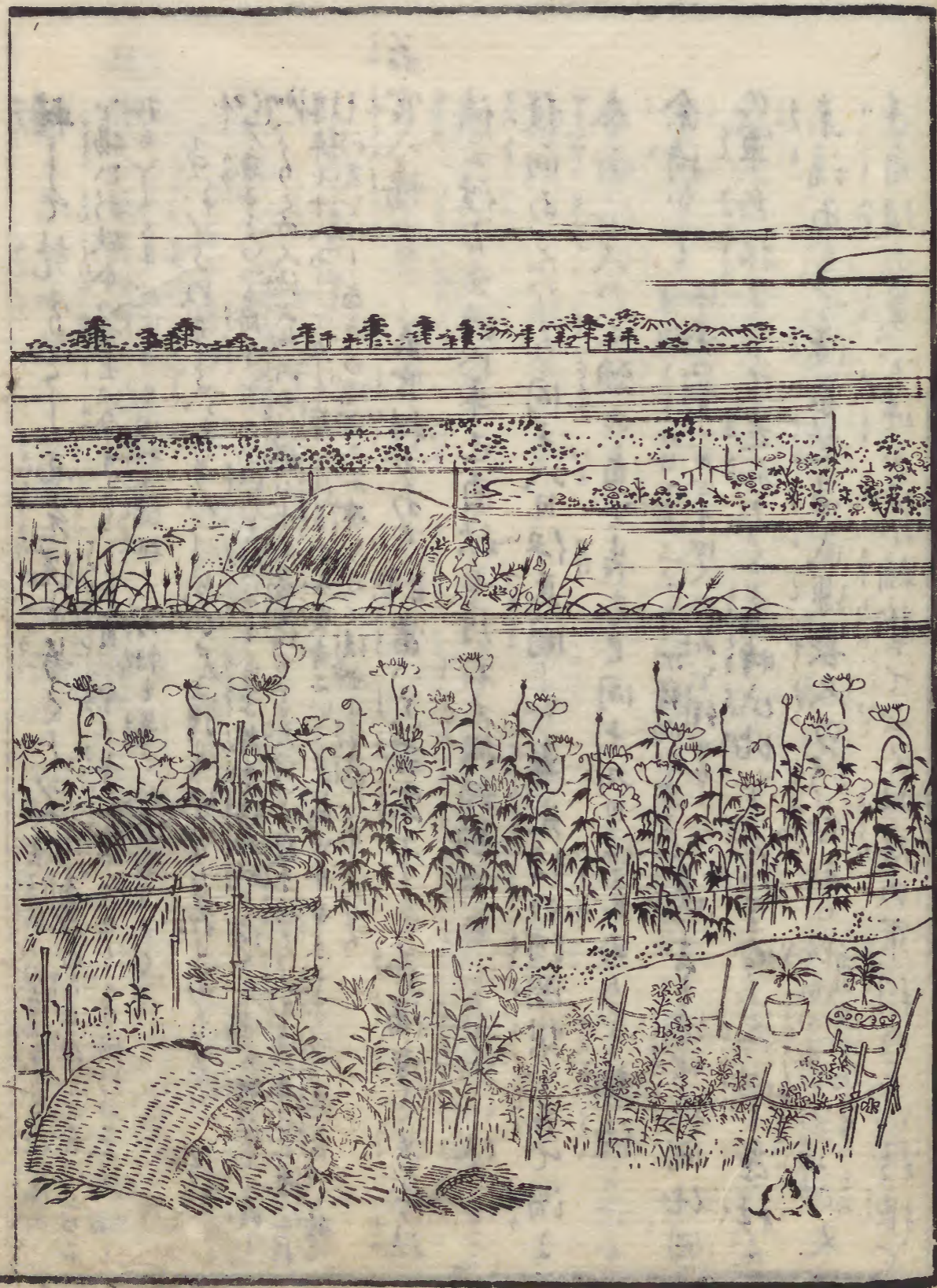
覺音法印といふ本尊溜瀉光如來の弘法大師の作りて子葉次常

胤崇尊の靈像ありと云傳へて靈驗著し

相傳ふ子葉次常胤のなき裔も同五郎胤朝といふ者あり下總國香取

郡石出といふ地に住居し石出日向守と唱ふ

其末流冷雪入道吉深に至るまで此牛田村に流れ住竟莊園の地を



葛西の辺人家の後
 園わら八圃畦ふも
 悉く四季の系花を
 栽並とへるもあま
 芳香たよ穠郁り
 大開花の時とほ
 満てまれば刈取
 大に戸の市街を
 花戸ふゆて
 鬻りゆりゆ
 影



轉して梵宇と西光院と号くといふ
吉田家の子孫に因りて食禄三百石
と賜ひ御獄令の官士に命ぜりし
私にせしむるに延宝中牛田村に隱栖し
軒と号く和名あり云く

子たぬれ才とありて
宋の戸月もひりなり花もありなり 常好
此戸麻子といふ冊子といひて
初より人の源氏物語の御解七十卷
享保七十の年ありて卒を葬と流罪の深慶寺に
置りて其の境に小石碑と建てて後世に
傳へしと記しあり

若宮八幡宮 若宮村あり 別當は善言宗とて善福寺と号す社

傳云姓古文治六年己酉秋七月右大将頼朝卿奥州奉衛征伐して

發向ありて同日伊豆國より専光坊の阿闍梨と名て潜し

奉衛征伐の立願の旨と告らる同日十九日途出ありて勢饒より子

余濟ありて東海より十九日丁丑二不奥州發向の東に
供奉の衆一百四十人の名を録せりまゝと途中近國他國

の軍兵拓きて走加らるる時此地より河をわたり序路をたて社を

系詣ありて源家繁昌武運長久之の祈念あり此の日本道は
昔の奥州街道なりと云又

手自榎の策と逆小地小指禁て云く此度の軍利ありハ枝根と

生して棠沙へといふ其榎は樹なりとて
今ハ存せず竟不奥州と治く凱陣あり

乃其後鶴岡若宮八幡宮と勸請を此地ハ葛西三郎清重乃

願地たふより清重不命して社頭と經營せり又神田芳氏

寄附せり其後年代遠く隔るるハ障霧ハ軒と侵し淫雨

と靡と洗ひ春草年々小生し秋の萬月く小茂を瑞籬ハ崩れ

神措朽て破壊おほひて天正の後 台命ふより伊奈

備前守再興ありより重祢と朱の玉籬光と彰りて

夫も又昔より今ハ古松老杉矯々として寥々として社頭

とある

法華經一部一卷 其文漸く守よりありて卷とる
圓はうふ指渡ハ八九分
其奇古あり寺傳の流ハ頼朝令の奉納ありといひつて筆者ハ文意ありと

超越山西光寺 澁江村あり 小田原北条家の古文書ハ山中内通介
所領小澁江の地名と主トあり 往古

淨土宗の寺院あり葛西三郎清重 從五位下壹岐守豊島
梅頭清光の子あり 開基たり



水用

清江
西光寺
清重稻荷



一、う、今天台宗改む本多ハ親鸞上人親筆此阿弥陀如来
の画像と安き當寺の閑基清重ハ鎌倉代勤仕の士あり
文治五年奥州泰衡平治の後同年九月彼地のを以て
任せしむ實朝卿鶴岡八幡宮拜賀の頃も随兵少加人
代々此地に住を親鸞上人東國遊化の時此地に至り清重
の宅に投宿あり一時上人の弘法に帰依し弟子乃禮を
儲け名と西光坊と号し又居宅の地と搏し寺院と宮建
し直し西光院と号く本寺の胎壇ハ清重彫造する所乃
聖徳太子の木像と安置せり

按東鑑法義四年庚子十一月十日戊午帝陸奥佐竹太郎義政同冠者
義義と西光坊と號し凱陣ハ鎌倉小歸り下武蔵國丸子莊に以て
葛西三郎清重ハ揚子今夜宿あり清重妻女ハ一子生れし由
備へしむ但一子生れし由と申すと流給構の他所より青女と招くの由
言上もあつた此地

清重稻荷祠 西光寺の西の畑の中あり松杉生たり

古叢少々此所ハ葛西三郎清重の墳墓の地なり今稻荷寺

勸清寺 一年の共此塚有る土中より石櫃ありん出され土人蓋と

大寸八分ありの座像あり今西光寺に収む除武具のたぐひもあり胸中ハ漢佛あり

永祿二年田原北条家の所領後帳ハ遠山丹波守所領の内ハ土人城址又

御殿跡とを稱し今猶四方五六拾歩の所除地あり老杉矯々

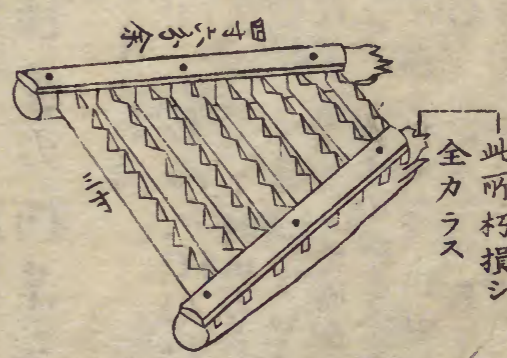
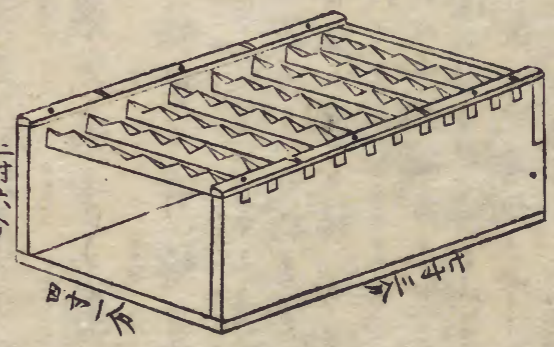
たる中ハ小祠あり此村農人の中ハ廓の誰陣屋の何某を

字ハ昌少ありて皆其時世より呼來りたり

按北条九代記ありハ太平記の書ハ青砥左衛門ハ伊豆國の住人大場
十郎近郷の後裔なり近郷義久の北より字法の名ハ向ハ大動功あり
藤綱ハ藤満の妻腹ハ生れて赤子ありと云くあるハ青砥左衛門ハ上総國から
上総王青砥莊より東遷ハ見ゆれハ此地考へるとありハ定ハ此地ハ
青戸と唱へ來りて既ハ藤綱ハ青戸と稱し是ハ此地ハ
古製ハ葵擦 此地の農民茂者ハ是ハ持傳ハ賞まきりのみあり

挙るの土人此器と青底なる工夫小せりと云はれども其可成ハ論も有り
 が今も此川辺の農家は是と用ゆるものあり其図左のとす

全形図のこくく杉とてつく
 製を竹の厚きと鋸の齒乃
 こくく夫と横の板切
 縁と打付て動くぬやう
 昔蒲草よかくのまとき
 紋あると俗よわひおろし
 出せし器の形と借てし
 又下は図もおも製大方
 同くして形も異なり



木下川薬師堂

木下川村あり

土人小田原北条家の所領役帳に朝倉平治郎
 作小田原北条家の所領役帳に朝倉平治郎

青龍山浄光寺薬王院と号す天台宗

して東叡山に属せり

本堂 本尊薬師如来

傳教大師の作照土日月十二神將の
 縁心僧都乃彫造なり

白鬚明神祠
 堂前左の方あり廣智筆の作垂迹の姿ハ老翁の木像也ハ本堂より西に異相あり
 本地不動明王の像ハ慈覚大師の作垂迹の姿ハ老翁の木像也ハ本堂より西に異相あり

天照太神宮

神籬ハ兩室童子や々本地弥陀
 山王権現宮

神籬ハ一塊の灵石
 辨財天祠

如來なりむら兵乱の頃給事し今ハなかり共
 中御あり護加藍神と稱す往古慈覚大師淺草寺の觀音ハ此の時際雲青龍寺の方
 大師の作の聖徳と熊野権現祠同大門の前あり昔子葉介常龍教の神者ハ此の
 西親世音十一面觀世音の三尊と流治の像と此地の土中より掘出さるる
 今本堂不安ま

東照大権現宮

神籬ハ御本地薬師如来
 我幸は持する所の畫影と寄附さるるを親ら點眼供養しそまつり神儀乃
 上自筆ととり題して曰く

歸命満月海 淨名瑠璃光 法樂救人天
 因中十二願 東照大権現 三國傳燈 行探題 天海開眼

本尊薬師如来縁起 一卷
 如文の

青龍山薬師佛像縁起 佛而刻像初焉伽藍者須達
 原夫佛像者優填王慕佛而刻像初焉伽藍者須達

江戸名所記
 江戸一帯 毎朝
 六日なりひふ
 元三の朝 中々
 うあす 本尊
 の 浄前 於 燈の
 あつ 燈 さい せき
 人 以 けり あり
 され と せり 今
 絶 々 々 々 々 々
 あつ せり あり



木下川薬師堂



所期未得此山附日當去他日再來耳又告弟
顯密之教三其志積萬年觀其直視忽然明淨或遠
至貞觀二年三月其志積萬年觀其直視忽然明淨或遠
造營成一如其人志積萬年觀其直視忽然明淨或遠
視道俗有五日有禱光佛出見或綠
境奔起堂見五色不徹到者小佛或見多像或綠
色見聖僧或有全使見者或佛或見多像或綠
善有至誠人得見徹到者小佛或見多像或綠
重罪重善友教使徹到者小佛或見多像或綠
地般重瑞應賜田數百畝永充供馬之後二源乎朝
廷聞其瑞應賜田數百畝永充供馬之後二源乎朝
都自刻是也光表十神願置佛之前徒合一善十
二院名曰淨光寺其地鎮護國之實以告來哲
叙紀時遷世變懼其實是本鎮願置佛之前徒合一善十
嘉曆二年夏六月十五日住持沙門義純謹書
本尊緣起曰延曆年間傳教大師東國化益の為叡山小於
藥師佛と彫刻を漸多の頃一夜此の像大師の爰告て曰く
汝の念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんといひ明旦使あり
我西より一と大師警き爰覺ぬ然も明旦下野國大慈寺の廣智

其頃叡山ありし此日歸んといひ先大師お別と告んを來
し謁をある於て大師佛意と悟り靈夢の瑞と語り竟し其
像腰と彫刻せしめて錦綉とめて是と纏ひ廣智の附屬を
佛神僅小半より廣智謀して佛像と眷屬を東に還り武州
上とあるの今の本下川の時は偶然とて一の老翁小逢へ
到る地あるなり
明神翁依然として云く我靈像の到るを待み久しといひ我草庵
小安まへると云智喜んで彼像と翁を附し又此地お伽藍と建む
と告翁云時縁いよ熱せし汝且還り去ま依て廣智を此と
思ひ止り郷里小歸り爾後翁村民小語て云く後善知識ありて必
あり小來り結若と當ん我今西州小にあり若歸り來り遅
うんあを此語と傳へて云畢り空と凌ぐ西小去まり村里の道俗
天際と見送り共々深信替首を後慈覺大師東國化導の時
武州小到り暫淺草寺の觀音堂小留り一日白髮の翁來り



浄光寺縁起よ
詳あり



木下川薬師如来の
具像ハ延暦年間
僧教大師殿より
在せし以本
化益のた形
送せし
此本もの具
示あり
竟まの像
授と刻
て綿繡
りて
纏ひ下野國大老寺の
彦智といふ沙門乃
東ふま海くんとす
付属ありしハ本
昔有像の地
以て木下川に安置
る奉り

大師小告て云く此所より東北に靈地あり藥師乃靈像
安まといひ畢て後其方と失ふ大師東北と望ふ忽然と
瑞雲起り中小青龍現を依て奇異の思ひをし漸し小寺と出
す元しむしふ果して藥師佛の靈像あり此時村人等集り
前の唱翁し言し告し大師して其人ありと稱し終し小合郡官吏
及び富民等財し傾しけし寺院と建立せんとき則弟子慶寛し
此地しと附屬ありし慶寛嘗構の志しと勵し貞觀二年の春し
至し諸堂落成しあしに於して慈覺大師しと開し山しと稱し性古乃
瑞小因しく山しと青龍しと号し朝廷其瑞應しと聞しひ田園百畝
と賜しひ永寺供し充し後惠心僧都二脇士及び十二神將しの
像しと彫刻ありし佛前し不安しせし又慶寛十二大願しと表して
十二の衆徒しと置し十二院しと合して淨光寺しと号してあり
當寺し、草創しより已降九百四十有餘年しと經しる古刹しあり

本寺し、光しと一天し小耀し十二大願しの衆徒しハ薨しと山中し小し
日夜の勤し乃怠慢しなく法燈し月しと越しと赫しとしりし一しふし後
關爭國々し不起し天下し大し乱しましる頃堂宇しハ破却し寺傾し
波收しせしまた又ハ兵燹し小耀して焦土しとしりし殘しり止しる住僧しも
なく唯本寺しのし草堂しの中しに在しせしふ天正しの末し四海昌平し
歸し一しなりし後同十九年住僧良完し德訴して竟し小業師堂
願しの朱章しと揚しりねし志しありしりし己未し國家泰平しの祈念
念しふしりしあしく本寺しの靈驗しいしりし著しとあり

中川 隅田川と利根川の間に夾して流しる中川の号あり
ととて荒川の分流熊谷の辺しりしとて遠く埼玉と足立
と北西郡の合しと流しる利根川の分流も川俣よりしりし
二水し接しり俣の辺して合し版塚大谷龜有新宿等の地しに添して青
戸奥戸平井木下川及び小村井逆井と經して海しに入しるしりし
中川と



中川釣鱧

春鱧三月の末より
四月小入り盛るる春
約と云ハ寛文の南総
仁の松頭仁豊と
人是は徳川岩流
といハ則人始
りく早より後春鱧
と釣る世小盛るり
と云種鱧八月の末
より九月までと節
と改然れも十月より
寒氣中つれを伸し
出るる川釣小幸は
漁人海を産する白
鱧と呼川小ありと青
鱧と唱少又鱧小
の差あり遠歳後
白く五六寸と二歳

下 下



と暖す
く黄色と帯て
脊より
わく七すより
八寸迄と二歳と
後黄色小
と帯脊の通り
九寸とと鼻曲と
号く鱧あじと
載と寒風と
漁人の
説あり





上と古利根川より河古水戸黄門光園水府入の此中川乃
中川と命せしむるなり

中川やほろひても地りる月 嵐雲

立石 立石村五方山南藏院とて真言宗の寺境あり地

上へ頭まゝ不終又壹尺まゝなり土人相傳へて石根地

中小入り其際とてあはれいり石質弱して色世間

小松まゝ鞍馬石小似り此石寒氣と帯まはるかた

損まゝせんも春暖の氣と得る時ハ又元の如くと云

近々四五箇村の名とて立石とて分々とあり

熊野権現祠 同境内良の隅あり今日地と失ふは鎮座乃

年歴等と詳小せると神骸ハ一箇の靈石なり

本あり二尺より末まで六寸あり 其餘武州練馬の石神井村石神井

社及び多摩郡阿佐り谷神明等の神祇乃靈石何れも

其形相似り

披し神素皇孫の降り時諸部の神の佩せし頭槌釧あり

日照山普賢寺 上千葉村あり新義真言宗や本多薬師

如来ハ佛工春日の作なり弘安年間法空阿闍梨開基に

地名あり當寺食邑の跡あり普賢寺村と号せり 境内ハ葛西六郎と

人の墳墓あり

按し葛西三郎清重の氏族なり東鑑は建曆三年癸酉五月三日和田左衛門

尉義盛兵を起し將軍家及び執権義時の事とあり余下に葛西

六郎とて名をとり武藏國の住人とせり恐らく此人なり

真光山善通寺 逆井渡口より八九町東の方東小松川村より

一向宗西本願寺に属せり本寺阿弥陀如来ハ来迎の像あり

相傳へ往古千葉介太郎宗胤の守本寺なり 宗胤没落

の後家臣秋元刑部左衛門尉胤次と云者是を傳へる歳



五石村
五石



月と歴より後親鸞上人胤次の家小止宿せらまゝ一頃
 胤次上人の宗化小帰一室と當こ此本寺と安す然し
 永正年間兵火小罹々々堂宇悉く焦土となりしうと本寺の
 持退て恙印となり天下承平の時小印り終一室と闢く
 善通寺と号くとしり
 阿弥陀如来画像一幅 秋元利左衛門の子孫今も此村の中二四有
 中将姫製まうとあり惣地一藕の縁ゆりて津首の
 八日より同十日迄此像と掛く諸人よ相せむ注古
 賊難お逢しりても威風凛々ありて失しやあり
 十字名跡一幅 此像と書て奉へらまゝとあり今も傳へて尚寺あり
 醫王山妙音寺 東一江村小印り真言宗ありて建久元年秀栄
 上人開創する所の精舎あり阿弥陀如来と本ると云尚寺小安置
 の茶師如来の立像ありて佛工春日の彫造ありと云傳人姓古敏也
 安房守某あり人の念持佛ありて靈威の尊像ありと云辨成天
 此宮ハ堂前池の中島ありて寺記小寶治元年丁未勅清と云

二之江
妙勝寺



二の江より今井
舟は桑川のわたり
小登る海苔と
世に葛西海苔
と称す本草の
所謂紫菜の類
中へ藻草海苔
も異あり





今井の津頭

柴屋軒宗長永正六年の記行東土産隅田川の河舟よて葛西の府のちを頼昭をり葭芦をよき今井とつ津より下て浄土の寺浄真寺に立ちてとあれはとて

此津の

あつみ

あつみ



今井

淨興寺
琴彈松

東土産

下士根

きかぬ

雪の

十里

方丈の西にさ
びい雪のり
あり云

宗長



和歌を詠せし是より後琴ひき松と号せり

武蔵野紀行

松風の吹まはるるはよみゆきとあへてはるるをわすれぬ

北条氏康

按氏康紀行の記に浄興寺と世人木下川の浄光寺と思ひあはせられたるは、
既久一寺号ハ松と文字興と光との違ひあり氏康あり宗長の記の
共ハやのあり文字浄興ハ作とハあり寺をさし置て尤明らハ珠ハ松
下川の浄光寺ハ慈覺大師開創の精舎や天台止觀の法燈赫々たりと云ふ
當寺ハ記主禪師の用基やと云ふは浄興の仁利より後文庭前琴彈松と稱さ
古撰あり又東土産に述るるは當寺ハ西南の於遠くひけく芙蓉の峯ハ相對
眺望する不宗長ハ句意たたるなり然る時ハ此や川の松を明澄と云ふ

天川山妙福寺

下鎌田村

浄興寺の北二町を隔て浄土

宗中今井村金蔵寺に属す中興山ハ徳譽叟公和尚と号

本号ハ阿弥陀如来なり

親鸞上人御影堂

此堂の前左のあり相傳ハ昔親鸞上人東國遊化の頃
此地をよきりあり時ハ早稲や里民の歡ぶと云ふ

三年帰洛の頃自身の肖像を造りて置てあり毎歲四月八日より

北條氏康

かき

ま

ま

ま



天文十五年比秋小田原の
北條左京大夫氏康むす
野小鷹狩の時葛西の
浄興寺に一夜のやうと
とらわれ松風入琴
とる和奇と題
を詠せし
武蔵野
紀行
えんり

松風乃

吹こゑ

きけ



同十日迄佛龕を削き親上人の鏡々池本堂の後より止入自ら彫像を造りたる時此池より面影を
御影を彫りし因道俗群集す
袈裟懸松洞傍よりあり回樹ハ太子堂本堂の前右の於よりあり
靈像を先太子自ら作らせし云傳へて毎歳二月廿一日江戶御影堂より相對せり聖徳太子の
帝釋天王柴又村経栄山題経寺安置也二里当寺ハ寛永
年間の草創なり



縁起云當寺第九世日敬師在住の頃堂宇大ニ破壊を師
深々是を歎き普く四方へ行乞へて再興の志を勵み終り其
堂舎を造改んとする時梁上より此板本を得て旧當寺ハ
高祖大士手刻の祈禱本と稱するものあり由云傳へし其の傍り
此時入至りて空長二尺五寸
厚サ五分あり製板なり片面ハ中央より首題あり左右より兩サ四菩薩又病眼
消滅等の数字を刻し其下ハ五月日とあり大士の号あり花押と印せり又片面ハ
帝釈天王の彫像あり右の沖より鉤と持し左の沖より開きと怒怒の相とあり
是除病延寿の本と悪魔降伏の本とあり信紙の章ハ是と印しとあり
あまのあまの希代の本とあり古撰の四天王寺と印しとあり帝釈天降臨あり
更申の日なり當寺の板本出現も又更申ありとあり因縁あり此日と

